

子どものいる暮らし―男・夫・父

覚悟を決めて

子どもの中に居てゆくつもり

松浦 浩樹

「パパなんかと遊んでもつままない」と言っ
て、日頃息子（現在五歳）が親しくしている男の子が
休日に我が家に遊びに来たらしい。私は外出して
いたので、後になってその報告を妻から聞く。息
子と遊ぶ事をそんなに喜んでくれる友達が息子に

できてよかったと思う反面、「明日は我が身。い
つか自分も息子から、そんな甲斐の無いことを言
われてしまうのだろうか」と覚悟する。

一方で私はこの頃、妻から報告される息子達の
話が実に面白いと思う。母親たる者、こういうと

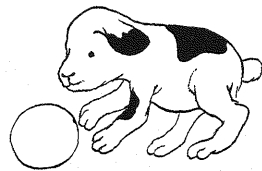
ころを見ているものなのだといった私との感じ方の違いを意識もするが、四六時子どもと一緒にいて、こういうところを印象に残しながら、日々の子育ての糧にしているのかと参考になる。参考になると言うのは、職業意識が働いて、あまりよろしくないもので、とにかく面白いやら放っておけないやらで、夫婦の子育て会議の尽きない話題になっている。また、妻の話と共に、日頃の息子の姿から私がダイレクトに感じることを含めて、新たに「子ども」を知ることも多くある。日頃保育の中でも繰り返して出会う子どもの生の姿が、息子の姿を通じて、一味違ったあり方で私の心の中に映る。そのこと自体がまた、私が保育に出てゆく事を押し進めてくれる。

覚悟すべし

私は保育に携わるようになって八年、このよう

に妻から受けると同じような感覚を、他の保育者にも、もち続けている。自分が面白いと思った現象を話しても、話せば話そうとするほど、自分でもつまらないと思う。でも、周りの保育者は、子どものことを語るに天才的な感性をもっている方が多い。時に、こんな事を「面白い」と思うものなのかと、むしろ自分の感性を疑いたくなる事もしばしばある。そうなれば、自分を磨こうと気合を入れて、ここ数年過ごしている。気がつく毎朝、保育に向かう前「さあ、今日一日がんばりましょう」と自分に気合を入れていく。

何をがんばるのかはともかく、そうやって保育に向かう自分を整えているような、どこか生活ス



ダンスの切り替えと言うか、自分の心や頭、身体全体のスイッチの入れ替えを無意識のうちにして
いる自分がある。

津守真先生ご夫妻の会話の記述を思い出す。

「私は子どもたちの中に出てゆくとき、きょうの一日を子どもとともに過ごそうと覚悟を決める。

—略—そうでないと、しっかりと子どもと応答する気持ちが高ぶりがたう。—略—私の妻は、覚悟を決めて子どもとどこに出るかと決めるのはおかしいと言う。このこと、ある時期、毎日議論したことがあった。」(「子どもの世界をどうみるか」NHKブックスP.118—119)

男性、女性の別にこだわるわけではないが、ただでさえ男性が幼稚園の先生をするということがピンとこない人がまだ多く、まるでそれで身を立ててはいけないうちでも言うかのごとく、「子どもと遊んで給料をもらってる」といって酒の肴にさ

れることがある。こういった一般的な印象が、ある覚悟を必要とさせている心的側面もあるように感じている。

また一方で自分の身の回りの子どもの生活にかかわる女性(妻、保育者、子どもを通じて出会う母親)は、男の私から見ると、ごく自然に子どもがいる生活に入ってゆくように見える。「入ってゆく」という意識がそもそも違うのかもしれない。まさに「子どもとの生活の中に投げ込まれていく」ことを自然に生かされる。そのような姿を見て感じるとき、父親として、というよりは、男性保育者としてのアイデンティティーが何であるのかを揺さぶられ、考えさせられる。

その時その時に子どもと共にいて、彼等の気持ちを感ずたい気持ちが強ければ強いほど、自分の心と頭の引出しを一度全て閉じて、子どもと交わすことばの引き出し、遊ぼうとする気持ちと身体

の引き出し、子どもの心の引出しを開き直しているような気がする。こう表現すると、何か大袈裟な事のように自分でも感じてしまうが、このようなある種の覚悟を「さあ」という一言で、保育中何度も一瞬のうちにやっているような気がしている。そういった覚悟をもたないと、子どもとかわる、その気持ちがまさに「浮き上がってしまふ」のを何度も経験した。私の身の回りの女性は、実にその辺が自然にでき、保育者としてはうらやましく思ったりする。それだけではなく、もっと根本的なところで、子どもにかかわることが、自分の人生の中に当たり前に、しかもしつかりと組み込まれているのだということを知らされる。私は保育者として、ある覚悟をもって保育に携わってゆく中で、その心の自然さが、身に付いてゆくのであろうか。

もつれた糸と覚悟

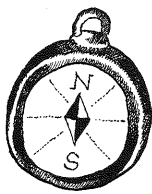
一九九八年度、私は保育に携わって七年目、初めて年中組（四歳児）を担当した。以前より先輩の保育者から「年中の子がどのような生活を送るかは、発達の要だ」ということを教えられていたが、この時期をどのように子どもと潜り抜けていくか、頭で理解しただけで、実感を伴ってはいなかった。その後一九九九年度、また、長男も四歳、五歳への移行期にあった。この二年間を通じて、どうも訳の分からない、混乱した心をもつ子どもの現実にくわつても出会った。自分でもどうしてよいのか分からない、どうしようもなく葛藤している彼等の前で、子どもにかかわる者としての自分をどのように向き合わせるのか、糸口が掴めない、私の方こそ混乱する時期があった。このことは私自身、とても衝撃だった。

一九九九年の冬のある日、家族で公園に出かけた時の出来事。もうすぐ五歳になるうかという長男は、この時期、なんでも一人でやってみようとするが、ことごとく自らの前に立ちはだかる壁にぶつかっては挫折する経験を何度も積んでいる。

この日は、幼稚園で出会った友達との刺激を受けて、チャレンジしようとして縄跳び、ローラーブレード、そして凧上げをしようとして意気込んでいた。ローラーブレードは怖さが伴うので、簡単にはいかないことは彼が十分承知していて、「今日はここまで」といった感覚をもってやめてしまった。その後の縄跳びと凧上げには、私は参ってしまった。縄跳びは一回は跳べるが、どうしても、二回三回が跳べない。私も励ましたり、「こうする」「ああする」といつて、なんとか跳べるようにしてやりたいと願ってかかわる。彼は泣きべそをかき。その悔しい気持ちを「ほら、できないじゃ

ん」とまるで私が悪いかのように八つ当たりすることでも表した。初めの内は、意識を変えてやろうと、あの手この手を工夫するのだが、ついに私も絶えられなくなって、「じゃあ、凧上げやろう。そして、またやりたくなったら、縄跳びすればいいじゃないか」といいながら、方向を変える。

今度は凧上げ。この時期の子どもなら、糸を二、三メートルのばして走り回る方が楽しいはずだが、彼は小学生がやっている凧上げを見て、その通り三、四十メートルのばしてやりたがる。毎日公園で過ごしている彼等は、妻という時は二、三メートルで走り回って満足しているが、休日、私と過ごす時には、このようにな難題をぶつけてくる。これも父親冥利に尽きるところ。凧が十分に上がりきる



までの速さも無く、凧はすぐに地面に落ちてしま
う。二、三回すると、彼は癩癩を起こす。それで
もなんとか励まして、もう一度やってみる。やは
り上がらない。彼は悔しさのあまり、その凧糸を
ぐちゃぐちゃに絡めてしまう。私も、気持ちがあ
へトヘトになり、「なんで、こんな事するんだ」と
怒鳴りつけ、複雑にもつれた糸の部分の切つて繋
げようとしたところで、その様子を見かねた妻が
「私がする」といってストップをかけた。まさに
私が「切れた」のだった。

妻は息子と共に地面にしゃがみこんで、解くの
は不可能と思えるくらい複雑にもつれた糸を、ひ
とつひとつ丁寧に解きながら、息子にあれこれと
話しかけている。息子は始めこそ、ぶつけようの
無い悔しさを涙で表現していたが、徐々に妻の話
にうなずき始め、長い時間かけて気持ちを立て直
していった。そして妻によって再び一本に解かれ

た糸を息子は糸巻きに巻いて二、三メートル残
し、再び、いつもの凧上げに走り回った。

私はその傍らにいて、その妻と息子の様子に
ショックを受けた。私などつい「息子と思うと、
情けない」という思いにとらわれ、エネルギーが
沸いてこないのだが、妻には「よくぞ、ここま
で、付き合うな」と改めて母性なるものの強さを
感じるのだった。その夜、冷静になってこの事を
考えてみる。考えてみるというよりは、子どもに
かわる仕事をしている者として、このことが
ショックで頭から離れなかったのだ。それは、二
年前に初めて四歳児クラスをもち、その子どもた
ちのもつれた心に上手く向き合えなかったという
自分自身が抱いた課題と重なっていた。

何がショックだったか。それは妻が、息子と地
面に座して、糸がもつれた部分を一つ一つ解きな
がら、向き合っている行為とその背景にある気持

て、悔しさや怒りを表していた。混乱し、グチャグチャにもつれていた彼の一本のまだ細い心の糸を、妻は息子と共に試行錯誤しながら解き、新たな前進力を与えている。それから数ヶ月した今、彼は、夫婦で「一皮剥けたね」と話をするほどに、何か安定した気持ちで、自信をもって、いろいろなことに挑戦しようとしている。

たかが風糸ごときを大袈裟に表現したが、私にとつては、子どものいる生活を考える大きなヒントになった。私の保育がある期間、観察してくれた研究者から「男性、女性の違いというわけではないんだけど、私の主人もそうなんだけどね、松浦さんも、子どもとのかかわりが階段状なのよね。必ず、ワンステップ欲しいと言うか、ハッキリさせたいと言うか。保育って、もっと引いたり緩めたり、混沌としたところがあるんじゃない」という言葉を頂いた。私は、これまでを振りか

えって、この言葉を真摯に受けとめたいと思っ
ている。父親や男性保育者に子ども自身が求めてく
る表層の部分（例えば、ダイナミックさなど）に
張りきり過ぎて、ついついその子の技術的な側面
を押し進めてやろうという邪念や根性論が付きま
とつてしまう。子どもの心の育ちに意識を立ち戻
らせねばならない。その意味でも、私は子どもに
かわる前に「覚悟」を決める必要がある。私は
この事を考え始めてすぐに、津守真先生の子ども
の描画に関する「もつれた糸玉から中心のある渦
巻きへ」の記述を思い起こし、読み返すと、先輩
の保育者の「四歳児は発達の要だ」と言われる事
と共に、改めて一言一言が身に迫って感じられる
ようになった。

津守先生はかわった子どもA子の描画の変化
と心の変化を詳細に観察され述べられている。
「ごく小さい時から、A子は、大人には理由がわ

からず泣きわめくことがしばしばあった。その時にはA子の世界はもつれた糸玉のように、自分でもどうしてよいか分からない混乱の状態にあつたようである。しかし、人間は、混乱した心の状態のままでは耐えられず、自分の世界に中心を見出して統合へと向かう心の傾向をもっている」

(前掲書 p.25)。そうして「大人に助けられて、子どもは自分の生活の中心を見出す。子どもは成長しつづけ、それに伴って環境は変化しつづけるので、子どもは何度も、新たな中心を見出さなければならぬ。この最初の時期に、混とんの中から中心を見出す体験をした子どもは、それをイメージとして身体の中に記憶する。その原体験をもつ子どもは、次にまた同様の混乱に陥ったときに、たとえ内容は異なっても、中心を見出し得る自信をもつであろう」(前掲書 p.28～29)。自分ではどうしようもなく、混乱した子どもの行為、大

人には訳の分からない行為を、子ども自らが力を発揮して活動できる自信を見出すために、非常に意味あることとして捉え、大人がその状況そのものを「もちこたえ」、向き合い、子どもが「生命性をもつて未来に挑戦してゆこうとするところまで」(前掲書 p.30) かかわりたい。理解できない事が多くある中で、行きつ戻りつしながら、それぞれの子が「中心」を見出してゆくプロセスにかわりながら、私自身もその事を何度も振り返ることで、父としての、保育者としての「中心」を見出したい。それが今の私の新たな覚悟である。

(青山学院幼稚園)